

甲 第 号

家村 友輔 学位請求論文

# 審 查 要 旨

奈 良 県 立 医 科 大 学

## 論文審査の要旨及び担当者

	委員長	教授	國安 弘基
論文審査担当者	委員	病院教授	小山 文一
	委員(指導教員)	教授	藤本 清秀

主論文

Depth of invasion to the bladder wall as a prognostic factor and its association with circulating cell-free DNA levels in patients with muscle-invasive bladder cancer.

筋層浸潤性膀胱癌における壁浸潤長は予後予測因子であり、血清 cell-free DNA と関連する

Yusuke Iemura, Makito Miyake, Shinji Fukui, Tomomi Fujii, Sayuri Ohnishi, Shunta Hori, Yosuke Morizawa, Yasushi Nakai, Kazumasa Torimoto, Nobumichi Tanaka, Kiyohide Fujimoto

Current Urology, in press, 2023.

## 論文審査の要旨

膀胱癌においては、筋層以上への浸潤の有無は治療法や予後に大きな影響を与える因子であり、その術前評価は膀胱癌診療に大きな意義を有する。本研究では、41例の膀胱全摘症例において、粘膜から癌浸潤先進部までの浸潤長が癌特異的生存期間と逆相関を示し有意な予後不良因子であった。さらに、血清 cell-free DNA 濃度と浸潤長の間に関係が認められた。

公聴会では、腫瘍浸潤長に影響に人工的に影響を与える因子や血清 DNA の臨床応用との問いに対し、膀胱収縮や自尿の程度、あるいは、摘出組織の固定などが影響するためこれを均一化することでより明瞭な差異を検出できること、および、術式選択や術前術後の化学療法の適応決定への応用が可能との回答がなされた。

本研究は、癌浸潤長が浸潤膀胱癌の新たな予後因子となることを明らかにしたのみならず、血清 cell-free DNA 濃度が筋層以深への浸潤の血清マーカーとなる可能性を示唆している。これらは膀胱癌の周術期の補助療法の選択において非常に有用なツールとなることが期待され、重要な研究と見なされる。

## 参 考 論 文

1. Clinical significance of bladder deformity for intravesical recurrence after Bacillus Calmette-Guérin treatment.  
Takuto Shimizu, Shunta Hori, Yusuke Iemura, Atushi Tomioka, Makito Miyake, Kiyohide Fujimoto. *Int J Urol*. 2021 Dec;28(12):1304-1305.
2. Clinical Impact of Sarcopenia and Inflammatory/Nutritional Markers in Patients with Unresectable Metastatic Urothelial Carcinoma Treated with Pembrolizumab.  
Takuto Shimizu, Makito Miyake, Shunta Hori, Kazuki Ichikawa, Chihiro Omori, Yusuke Iemura, Takuya Owari, Yoshitaka Itami, Yasushi Nakai, Satoshi Anai, Atsushi Tomioka, Nobumichi Tanaka, Kiyohide Fujimoto. *Diagnostics (Basel)*. 2020 May 15;10(5):310.

以上、主論文に報告された研究成績は、参考論文とともに泌尿器病態機能制御医学の進歩に寄与するところが大きいと認める。

令和5年3月7日

学位審査委員長

分子腫瘍病理学

教授 國安 弘基

学位審査委員

消化器機能制御医学

病院教授 小山 文一

学位審査委員(指導教員)

泌尿器病態機能制御医学

教授 藤本 清秀